

# パープルレイン

煌滲

## I

阪急電車は、十三駅を発車すると、淀川の鉄橋を乾いた振動音を響かせて、ゆっくりと渡っていた。

・・・夏の頃、僕は、いつも電車の窓から淀川の中州に漂着している木舟を眺めた。その木舟の周辺には、葦が群生して短い木も生えていた。偶に、十数羽の鳥が群れをなして川面を素早く飛翔していることもあった。

が、いつ眺めても、そこは木舟と葦以外、何もないような季節感の乏しい景色だった。しかし、僕は、その何の変哲もない構図が、何故か好きだった。

・・・いちど八月の台風が近づいていた或る日、葦が強風に揺れていたことがあった。木舟の傍らには、白鷺が二羽、番いなのか、寄り添うように羽を休めていた。

あの時も、僕は、その木舟と白鷺を、唯単に、

景色の中のモチーフとして漠然と眺めていたに過ぎなかった。

・・・それが、あれ以来、その情景を思い出す度、ある暗い疑念が時折顔を覗かせるようになっていた。

## II

・・・半年前のあの夜、ネオン街は雨にくすんでいた。アスファルトに跳ねる雨の飛沫が、

店の玄関マットを濡らしていた。

「今日は、もうあかな。台風外れるといいけどな」

隣の店の怖いおっさんの声でした。夜の十時

だった。こっちの店も、今入っている客は一人で、今夜は寂しい客の入りだった。僕は、ラストの客が帰った部屋の掃除を始めた。

ゴミ箱に溜まったテッシュやバスタオルの数で、その日の客の入りがわかる。やはり、この部屋も、今日は、いつもより客が少ない日だった。部屋の女子は、客を見送った後、フロントでシフトの話をしていった。

この女子は、生理以外ほとんど毎日ラストまで部屋にいる子で、何か訳ありみたいだったが、指名は系列店では、常に上位に入っていた。女子は、思ったより早く部屋に戻ってきた。

「あつ、マモル君、私がやろうと思っていたのに」

彼女は、僕がベッドからバスタオルを外すのを見て、ちよつと気まずい顔をした。

「来週のシフトの打ち合わせ終わった？」

「うん、明日から生理休暇。なんかムズムズして間違いないなあ」

彼女の名は、A子としておこう。

待合室に飾ってある167cmの等身大の写真パネルは、実物と、そう見劣りはしない。客と彼女がエレベーターで初対面するとき、大抵の客は、ちよつと驚いたような顔をする。

A子は、ウクライナ人で、流暢な日本語を話した。女子の間では、ジブリと呼ばれていた。艶のある美しい白髪に、透き通るような乳白色の肌をしていた。それに、顔立ちと体形が可愛らしい。歩く姿も、どこか童女っぽくてステキだ。

あの時、A子は、ハート柄のポーチのファスナーを、何度か無理やり閉めようとしていた。その時、つい手が滑ったのか、ポーチが飛ぶように落ちた。あたりには、カラフルなコスメが、パツと散らばった。

そのなかに、マイジェクターがあった。僕は、驚いてハッと息を呑んだ。A子の顔色も変わった。A子は、慌てて床に散乱したものをポーチに仕舞いこんだ。が、まだ何かが足りないのか、バッグの中を頻りに覗き込んでいた。

「これ」

僕は、ベッドの下から小さなビニール袋を拾い上げた。白い粉がビニール袋から透けて見える。A子は、俯いてかなり決まり悪そうだった。僕は、言葉を見失っていた。

「マモル君、このこと内緒で頼む」

A子は、真剣な眼差しで手を合わせた。

僕は、軽く頷きながらOKのサインを出した。A子は、ほっとしたような顔に変わっ

て、頭をぺこりと下げて部屋を出て行った。

### III

その夜は、早い店じまいだった。

玄関の強い雨音は、フロントまで聴こえていた。僕は、部屋の掃除が終わって、いつもより早く店を出ようとしていた。僕の傘は、馴染み客に貸していて、店の傘も全部で払っていた。外の様子を窺っていると、オーナーが珍しく僕に話しかけて来た。「今、台風が四国に上陸したらしいナ。明日の未明、大阪にいよいよ直撃だ。けど、一刻でも、真下の上町断層より注目するべき自然災害があるっていうことは、心が若干休まるかな」と苦笑した。そして上町断層の蘊蓄を、僕に得意げに披露した。おかげで、こっちは少々背筋が寒くなった。

その日は、京都に帰るのを諦めて、北新地のネットカフェに泊まることにした。雨は店を出るときのやや小降りが、お稲荷さんを過ぎたころには、また少し強い雨に変わっていた。僕は、交差点で赤の信号を待つ間、一先ずコンビニの庇に避難した。ここからネットカフェまで、走って五分くらいだ。時折吹く突風に、コンビニのゴミ箱から溢れたゴミが飛ばされて、歩道に勢いよく転がっている。ふと、足元のコンビニの傘立てに、A子の赤い傘が目付いた。傘の柄が小さな七色の水玉ですぐにわかった。店内を覗くと、雑誌コーナーにA子の姿があった。彼女は、いつも服装が白っぽかった。店内では、彼女の白さが異様に浮き立っていた。僕は、彼女に漂う不思議な美感覚に、ちよつとの間見惚れていた。

A子と眼が合うと、彼女はすぐ店から出てきた。

「マモル君、傘持っていないの？」

「この傘みんな売り切れなの」

A子は、真面目な顔をして言った。

僕は、変にドギマギして肩を動かして、ちよつとおどけた仕草をした。

すると、A子は、急に僕の手を握って言った。

「ほら、信号が青だよ。雨が少し小降りになった。早くここを出よう」

A子は、水玉の傘を置いたまま、僕の手を引っ張って横断歩道を走り出していた。僕は、驚いている暇はなかった。途中、また雨は強くなった。

二人が、墓場の角を横切ろうとしたとき、車の急ブレーキの音が、路面に打ち付ける雨の音を消した。僕らは、危うく車に轢かれそうになった。それでも、A子は、悲鳴をあげながら笑っていた。

土砂降りの中、ずっと休まずに走っていた二人は、息が切れて路地裏のラブホテルの裏口に逃げ込んだ。よろけながら、二人は同時に大きく息を吐いた。それがまた変に可笑しく、二人は笑った。僕のTシャツの裾は、A子が抓んで走っていて、すっかり伸びてしまっていた。

「これから、どこへ行く?」

A子は、僕に訊いた。

ラブホのネオンが、滝のような雨に反射していた。それは、ハッとするくらい美しく淋しい光景だった。

「ほら、まるでパープレインだね」

僕は、気を紛らわすように指をさした。

「うん、すごく綺麗」

A子は、どこか楽しそうだ。

このホテルの裏口は、狭い裏通りにある。

その周辺は、夜になるとかなり暗い。表玄関の派手さとは打って変わって、大きな観葉植物で裏口を隠しているが、どこか犯罪特有の匂いがした。

以前、テレビの特番でこのラブホテルが売春ご用達として映っているのを観たことがある。その映像にあったのは、確か、この路地付近と、この裏口だった。今夜は、雨のせいで、周辺は特に怖いくらい真っ暗だ。

・・・突然、このビルの奥から、女の甲高い悲鳴が聴こえた。そのあと、カッカッと金属

音の高い靴音がした。驚いて振り向くと、

玄関の奥の照明にチラッと見覚えのあるデリヘル嬢が、こっちに走ってきた。

そして、僕の肩を掠めてパープレインに吸い込まれるようにスッと消えた。

その後、今度は、そのデリヘル嬢の跡を追うように慌てふためいて走って来た中年の男が、女とは逆方向の闇へ消え去った。

その男の鼻息と走り恰好が滑稽だったから、僕らは、また笑った。

・・・そのあと、二人に沈黙があった。

その沈黙に、突風や雨音が淋しく耳に響いた。

A子は、また僕のTシャツの裾を掴んでいた。

「服が濡れてビチョビチョ。ここですこし休憩する？」A子は、小さく呟いた。

「なんか寒いし、私ヤバイ」

僕らは、玄関の照明に導かれるようにホテルに入った。

#### IV

ホテルの中は、裏口の陰湿さとは一変して、刺激的な赤い光が、廊下を歩く二人を追いかけるようにライトアップされていた。

A子は、赤い光のなかで神秘的で妖艶な女性に変化していた。僕の脳が、急速に淫靡な何かになりかけていた。A子も、何やら刺激を受けているらしく、眼は、やや吊り上っている。

「どのルームにする？」

「まかせるWWW」

A子の声は、うわずっていた。

ここも今夜は、客の入りが悪いようだ。パネルの空き室が目立っていた。

二人は、最上階のオーロラという部屋に入った。その部屋には、ラッセンの壁紙が貼られていて、パープルのオーロラが絶えず揺らめく光の空間だった。

「ここもパープル。ねえ、パープルってどんな感じ？楽しい？」A子が訊ねた。

「楽しいとは、ちょっと違うと思うけど、

どちらかと云うと淋しい方かな」

「さっきの、土砂降りは？」

「あれはあれで結構楽しかった。君と一緒にだったし。今思うと、パープルレインも夢のようだね」

「その夢は、今も続いている？」

A子は、ゆっくり言った。

僕は、こっくり頷いた。

「じゃあ、パープルラブって夢の出来事？」

A子は、僕をちらっと見て、どこかもしもじしている。体の向きを跳ねるように、急に变えてムード・ランプの調整を始めた。

「マモル君、なんか超寒い。お風呂しよう。」

A子の可愛い笑顔のアップに、僕は卒倒しそうだった。

二人のムードが、急に明るくなった。

バスルームに入りながら、

「お湯、何度がいい？」

僕は、低温でこれが精一杯だった。

「ヨンマル」

A子の声は、少しトーンが高い。お湯の轟音が部屋に響いた。お湯を張り終わると、A子は、雨に濡れた服を素早くハンガーに掛けて、小走りに浴室に入った。A子の人形のような純白の全裸に見惚れて、僕のもものは、既に半立ちぎみだ。

「マモル君も早く」

A子が、僕を急かした。

「はい」と僕が慌てて返事をする、浴室からケラケラと笑う声が出た。

僕が浴室に入ると、A子は悲鳴をあげた。

僕が照れ笑いをすると、A子は笑った。

本当に、A子はよく笑う。A子が笑うと、僕も笑った。

浴槽に、向かい合うように入ると、お湯が溢れて湯気が濛々と立ち上がった。

浴槽のなかで、A子の太腿は白くすべすべしていた。

A子は、湯気で曇った湯船の上の大きな鏡に相合傘を指で書いた。そして、片方にマモルと書いた。

僕は、「ハートが大きいね」と笑って、もう片方に、ナターリヤと傘からはみ出るくらい大きく書いた。A子は、嬉しそうに、自分の名を指で何度もなぞっていた。

A子の顔は、少し赤くなっていた。

「お湯熱い？」僕は尋ねた。

「ちよっと熱いかも。体が冷えていたし」

僕は、湯船に水を入れて薄めた。

「気持ちいいね」と僕が言うと

「うん気持ちいい」とA子は繰り返した。

A子は、不意に、自分の太腿を僕の太腿の下に滑らして、僕の腰を浮かせた。僕が驚くと、A子は、僕とペニスを交互に見て嬉しそうな顔をした。そして、ペニスを握って睾丸を口の中で転がした。それから、ペニスを口に咥えフェラをした。

「今夜どうする？ 泊まる？」

A子は、上目づかいに僕を見ながら言った。

僕は、ブラック・アウトぎみだ。A子は楽しそうだった。湯船からあがるA子のお尻を眺めながら、僕は、これからの展開を想像して心臓はバクバク鳴っていた。

僕は、シャンプーの容器の中に、前の客の精液が入っていないことを確認してから髪を洗った。ちよつと、早めに湯船からあがって部屋に戻ると、A子は、変に前かがみになって椅子に座っていた。僕に気付くと、ちよつとびっくりした顔をした。

「もうあがったの。今日、イイネタ引いたの」

A子は、少し気まり悪そうな顔をした。

右腕には、黒ゴムが巻いてある。テーブルには、マイジェクターとブツ、ストロー、アルミホイル、角氷の入ったQブリックが置いてあった。

「マモル君も入れてみる？」

A子は、僕の機嫌を取るように言った。

「僕は、止めておく。注射苦手だし、それよりどうやって打つの？そっちの方が興味ある」

A子の顔が、パッと明るくなった。

「それなら、ご覧あれ。後で、見物料戴くし」

A子は、素早くアルミホイルで三角の器を作ると、それにネタを置き、Qブリックに溜まった氷水をストローで吸い上げて混ぜた。

それから、器を右手の親指と人差し指で摘まんで、器の裏を左手の人差し指で軽くパチパチと鳴らした。A子は、器を左右に揺らしながら僕を見て微笑んでいる。上手に、Pでそれを吸い上げると、Pをゆっくり押ししてから腕の内側に射した。そして、Pを少し押し引くと、血液が内筒にモァッと広がった。

これを数回繰り返した。

「ふーう」A子は、気持ち良さそうに息を吐いた。そして、三角の器に人さし指を入れてぐりぐりさせながら言った。

「今日は、詰5。部屋の光でオレペンの線がよく見えなかった」

A子は、少し笑った。僕は、A子の傍らに立って手際のよい一連の動作に一種のカルチャーショックを受けていた。

そして、僕は、A子を鏡から覗いていたような不思議な感覚を覚えていた。

今、僕が住んでいる京都の学生寮には、以前シャブをやっていた寮生がいた。そいつは、炙りという噂だった。一見、普通の学生のようにみえたが、近くで見ると、どこかオドオドして落ち着きがなく、明らかに、眼つきと顔つきがどこか変だった。一日中、部屋の鍵穴から廊下を覗いているという噂もあった。或る日、坂道を上りながら、何度も後ろを振り返る様子は異様な感じだった。

夏休みが明けたら、そいつは退寮していた。

しかし、寮内では、不思議と噂にのぼらなかつた。

A子の腕は、いつも注射の痕もなく綺麗だった。が、今は、その痕がやけに大きく見えた。店では、ファンデーションを厚く塗っていたのかもしれない。

「店のお客さんから買ったの」

僕は、すぐその売人の客に察しがついた。その客は、今夜A子を指名していた。その客というのは、痩せぎすで長髪を三つ編みにした黒人で、見るからに危険な匂いがした。その黒人は、噂ではナイジェリア人とのことだったが、店には、月三回のペースで来店していた。

以前、その男からクリスタルという痩せ薬を貰って喜んでいた女子がG子だった。今思えば、男が帰った後、彼女らの部屋からは、あの声が大きくなっていったような気がする。

「G子は、凄いのよ。ワンジーよ。仕事中心いつも汗だくで、しょっちゅう、お客さんから『髪洗った?』と訊かれるみたい。乳首は、常に立ちっぱなしで、あそこもグチヨグチヨ。お客さんに、指を入れてもらうのが好きなの。MDMAもやっていて、変態オナニーの常習犯なのよ。或る時なんか、背広のお客さんが鞆からクリア・フォルダーを取り出した時、警察と勘違いして、私の部屋にヨロヨロになって逃げてきたことがあった。そのとき、足の親指と人さし指が痙攣していたの」



A子の笑いながら話す声が、次第に大きくなっていった。いつもは、ブルーのカラコンをしているA子の瞳孔が、今は、パツクリ開いている。近くで見ると、A子の瞳孔が淡紅色

なことに気付いた。体も少し揺れているようだ。部屋の照明が暗くなった。

僕らは、喉の渴きを覚えて、大きな冷蔵庫の中を覗き込んだ。僕がコーラ。A子は、赤ワインを選んだ。

A子は、

「赤ワインとコーラのカクテルは、sexのサインなのよ」と言った。

僕が、コーラを飲んでいると、A子は、僕に何度か、ワインを口移しした。A子は、ワインを飲み干すと、A子の舌が僕の舌にねっとり絡みついてきた。それはまるで、何かの生き物のように、僕の口の中で気持ち良く動き廻った。その生き物は、今度は耳をゆっくり這いずり回り、次第に項から乳首に移った。そして、足の爪先から肛門まで丹念に嘗め尽くすと、最後にペニスを卑猥な音を立てて激しく銜え込んだ。A子の細い指が深くアナルに入ってきた。

それから暫くして、僕の意識は、液体になったかのように朦朧となった。

幽かな記憶には、部屋のオーロラが波打つように揺れる中、A子の声と恥骨の痛みだけが、ずっと長く続いていた。

朝、目が覚めると、A子は僕の傍らで俯せになって寝ていた。僕が、カーテンを引いて窓を開けると、台風一過の空は、グレーではなくブルーだった。清々しい風が部屋に入ってきた。白レースのカーテンは、風に揺れて、窓から射した光が、A子の白い腕の上で零れるように転がっている。長い睫は、静かに伏して、頬には乾いた涙の跡があった。

僕は、エアコンで冷たくなったA子に綿毛布を掛けた。窓からは、高架橋の騒音が聴こえていた。

僕は、A子と別れてから、梅地下のマックでこの出来事を携帯に記録した。

ここまでが、半年前のあの日の出来事だ。

これから、G子に出会ってからの事を書く。

僕は、心斎橋で用事を済ませ、梅田で電車を阪急に乗り換えた。宝塚行きの最後尾に乗り込むと、その車内が、異様にざわついていることに気付いた。車内は、真ん中付近に陣取っている茶髪の女子学生達にハイジャックされたかのように賑やかだった。彼女らのバーバリ・チェックの短いスカートから、はみ出した白い太腿が車内を一人歩きしていた。

次の中津駅では、今度は、忙しく乗り込んできた小学生の女の子達が、僕の側で、しりとり遊びを始めた。一人の気の弱そうな子が陰湿な虐めを受けていた。それでも、その女の子は、明るく振舞って虐めに耐えていた。

電車は、急に速度を落としてブレーキの金属音を小刻みに鳴らした。僕は、沿線のビルを眺めた。黒っぽいビルの屋上には、美白の女王の大きな看板があった。それは、いつも僕の視線を釘づけにした。その白く厚塗りされた顔は、いつも無表情で何かを語りかけていた。僕は、その顔が何故かたまらなく好きだった。

## VI

僕は、あれからマックを出て、地下通路の大柱に寄りかかっていた。そこは、JR大阪駅、阪神駅、阪急駅の六つ又交差点で、常に四方八方から行き来する人で終始ごった返していた。そこは、僕のお気に入りの場所だ。串カツ屋の脇の階段をのぼると、地上では、頻繁に路上ライブがおこなわれていた。その地下の交差点には、大勢の人が絶えず大柱から現れては、次の大柱に消えてゆく異空間スポットがあった。僕が偶然に発見したそのスポットは、或る時は、昔のサイレント映画のようになぎこちない動きをしていたり、また或る時は、物悲しい懐古的スローモーションだったりした。その異空間スポットは、僕にとって居心地のよい秘密の隠れ家みだいなものだった。バイトの早番の帰りは、必ずその場所で時間を潰していた。一度A子は、その異空間にスローモーションで、不意に登場したことがある。その時、A子は、チラッと僕を一瞥したような気がしたが、それからは、A子は、僕にとって何か特別な存在になっていた。

・・・あの時、僕はピンク・フロイドの『アス・アンド・ゼム』を聴きながら、軽い睡魔に身を委ねていた。その心地よい睡魔のなかで、僕は昨夜のA子とのSEXや今後の二人の行く末を感傷的に思い廻らしていた。

・・・突如、僕は誰かに、何度か強く肩を叩かれた。驚いて眼を開くと、眼の前に何か物体があった。それは、すぐ女の顔だということがわかった。香水の匂いでG子だということもすぐわかった。彼女は、僕の両肩に手をかけて、僕をまじまじと凝視していた。

僕が、しゃがんでいて身動きできずにいると

G子は笑った。

「どうして泣いているのさ。A子とSEXしたでしょ。お尻に、指入れられなかった？」

僕は、その言葉に凍りついた。G子は下品な笑いをした。彼女も今日は非番だった。G子は、店のサイトや写真パネルには、顔乗せZの女子だったが、それでいてグループ内では、常連の指名が多い売れっ子だった。

店での綽名は、エバアと呼ばれていた。

ルーミア人のクォーターで、自称マッシュアップと名乗っていた。日本語のアクセントが、微妙に可笑しいが、英語やヘブライ語が少しは話せるらしかった。G子がシャブ中なのは、店では、誰でも知っている。が、彼女の金髪慧眼の長身スレンダー・ボディは、全ての男に一度くらいはと思わせるくらい魅力的だった。

それに、何と言っても、彼女は、舌ピアスの激しいバッキューム・フェラが売りだった。G子には、奇妙なところも多々あった。

部屋を真っ暗にして、手鏡を見ながらローラーでゴミを取っていたり、美顔器のコックを身動きもしないで三十分以上見詰めていたり、エレベーターで客の出迎えのとき、眉毛の片方がなかったり。また、お稲荷さんの鳥居付近で、派手な幽霊騒ぎを起こしたこともあった。今思えば、それらの奇行は、シャブのせいなのかもしれない。

いつだったか、G子が十代の頃に、東欧のアンダーグラウンドの人身売買に巻き込まれたことがあると、店内で密かに噂が流れたことがあったが、僕はその噂を信じていた。

G子は、急に真面目な顔になって、

「店が盗撮されているのよ。その盗撮のDVDが、北新地のビデオボックスにあるのよ。今から行こう」

G子は、僕の二の腕を強引に引っ張って、曾根崎警察署の方へ歩き出した。地上に出ると、そのビデオは、何度か行ったことのある鮎屋の裏の路地にあった。路上に大きな看板を掲げ、地下に降りる階段は急で狭く、淫猥な広告が階段を埋め尽くしていた。店内の盗撮コーナーには、確かに、それらしきDVDが多数陳列されている。

ビデオ店内の客の好奇の視線は、G子をずっと追っていた。その執拗な視線を無視してG子が手に取ったDVDは、《盗撮！北新地・本番ヘルス嬢の実態！》と、タイトルが打たれていた。表紙の背景を見たとき、鳥肌が立つようだった。紛れもなく僕がバイトしている店の一室だった。ヘルス嬢は、モザイクで眼を隠しているが、F子に間違いなかった。

僕は、驚きで言葉を失っていた。

G子は、客が返却したDVDの匂いを露骨に嗅いで、消臭スプレーをかける目付きの悪い店員から、ボックス・キーを貰うと、眼で僕に合図した。

ボックスは、レジ側の隣の部屋にあった。

H字の狭く薄暗い通路に、9ボックスくらいの部屋数だった。G子がボックスに入ると、すぐ携帯からメールを打った。すると間もなく、ドアがスツと開いて、例の黒人が入ってきた。売人は、サングラスにブラックのハンティング帽と背中に大きな赤い星のGジャンを着ていた。売人は、一言も発せず、そのDVDを手際よく再生した。それは、密室キメセクの一部始終だった。盗撮は、2号室バスの左奥の鏡付近からで、もともとその部屋には、不自然に大きい鏡だった。その鏡は、2号室にだけ設置されていた。

画像は、眼をモザイクしているとは言え、売人とF子がマイジェクターを押している映像から始まっていた。会話も盗聴されている。そこには、ゾクツとする臨場感があった。

お金のやり取りもはっきり写っている。

売人によると、このDVDは、この店では常に貸出されていた。

「A子とキメセクした以上、お前もわし等と運命共同体だ」

売人は、違和感のある流暢な日本語で言った。その流暢さが、余計不気味だった。僕は、A子を助けたいと思った。売人が、そのDVDを最初に発見したのは、南のビデボだった。そのDVDは、三部作で、A子、F子、G子の3人が登場していた。売人は、G子にこの盗撮DVDのことを教えると、G子は、すぐに自分を指名した酔っ払いのサラリーマンを思い出したという。その客は、エレベーターでG子と対面すると、「本物だ」と呟いてから、すぐハイ状態になった。部屋に入ると、鏡を背にして、携帯の動画を見ながら部屋の中を観察していたらしい。売人は、僕の鏡の裏に繋がる隠し廊下を探して欲しいと言った。

もし、盗撮犯が店内にいたとしたら、A子、F子、G子を除くと、残り十九名の女子と二名の男性スタッフが全員容疑者になる。

しかし、女子は、姉妹店内で頻繁にヘルプの移動があるから、もっと数が多くなる。店長は、勿論、盗撮には気付いていない。店長は、オーナーの長男で、ネトゲ廃人だ。デスクには、ほとんど顔をださない。もっぱら奥の部屋に閉じこもっている。僕は、何度かその部屋から奇妙な独り言や泣き声を聞いたことがある。

「アンは騙されて殺されてしまった」

どんなストーリーだったのだろうか？ドアの向こうで悲しむ様子が尋常でなかった。G子によると、犯人は、スタッフKが怪しいとのことだった。G子は、以前、倉庫からKが辺りを窺うようにでてきたところを見ていた。売人によると、今の店の前身は、ソープだったから、もしかしたら、二階の倉庫に隠し廊下の入り口があるかもしれないとの推測だった。そうになると、建物の構造を知っている外部者が侵入している可能性もある。しかし、その売人は、その情報を一体何処から仕入れているのだろうか？僕は、底知れぬ不気味さを覚えた。

倉庫は、リネン室と物置に分かれていた。

物置には、白熱電球が一つぶら下がっているだけで薄暗く、常に独特な化学薬品の匂いかかっていた。前身のソープの備品らしきテーブルと椅子が、天井近くまで高く積んであった。両方の壁には、何故か遠近法の白線が引いてあり、この不可思議な白線が僕には謎だった。

スタッフKは、ブラックのBMWに乗っていた。

よく早口で喋る肥満の男で、餃子を百個くらい軽く平らげる大食漢だ。近々、車を

買い替えるらしく機嫌がよかった。日頃、Kはかなりの頻度でメールを打っていた。「女が煩くて」が口癖だった。

残りのTというスタッフは、逆に携帯のメールすらろくに打てない貧相な男で、話し方と態度が、どこかわざとらしい感じがした。

偶に携帯に電話が掛かってきても、いつも母親からだだった。母親は、何かの病気のようだった。他のスタッフとして、もう一人四十過ぎの女性スタッフがいた。主な仕事は、リネンの管理とフロントのヘルパーで梅田の姉妹店四店舗を掛け持ちしていた。女子達の相談役も兼ねていた。その女性スタッフJは、僕に中出しさせるからセフレにならないかと何度かしつこく誘った。スタッフKの犯人説は、本筋だと思った。いかにもやりそうな雰囲気を持っていた。僕は、スタッフKの休みの日に倉庫を調べることにした。

## VII

そして、その決行の日が訪れた。問題の二号室は、三十過ぎのS子が使用するこたになっていた。G子は、一号室だった。A子は、休みだ。店長は、ここ二三日部屋に閉じこもっている。スタッフTは、フロントから片時も離れることはない。すべて好条件が揃っていた。その日の夜は、お盆の十六日で店は忙しかった。店の女子達の顔も明るかった。チャンスは、思いがけずにやってきた。

部屋は、ほぼ満室だったが、オール・ラストだった。僕は、スタッフTから、遅い夕食時間を三十分貰った。その休憩時間の後には、各部屋の掃除が待っている。僕は、急いでコンビニへパンを買いに行った。御菜コーナーには、女性スタッフJがいた。十時を過ぎていた。僕は、彼女の住まいは、案外この近くのかもしれないと思った。

店に戻ると、すぐ僕は、アンパンを食べながら倉庫に入った。バッテリー切れが心配な携帯のライトが、暗闇を白々しく照らした。

倉庫の左奥には、カーテンでL字の形に仕切られた箇所がある。そこが一番疑わしかった。その重いカーテンの中に入ると、手前の棚には、古めかしい事務機器が乱雑に置かれていた。しかし、一番奥の端の棚だけは、不自然に整理されていた。よ

く見ると、その棚にキャスターが付いている。棚は、見かけより軽く横に移動できた。棚の陰には、厚いベニヤ板が立てかけられていた。やはり、隠し廊下は、そのベニヤ板の陰にあった。そこには、真つ黒な穴がポツカリ開いていた。穴の中をライトで照らすと、隠し廊下がぼんやり白っぽく見えた。が、売人から頼まれたのはここまでだ。隠し廊下の入り口さえわかれば○×だった。ふと、僕は、鬩り掛けのアンパンを落としたことに気付いた。足元を探している最中、今度はG子から貰ったオレンジを胸ポケットから落としてしまった。太腿に落ちた反動で、そのオレンジは、暗い隠し廊下へ勢いよく転がっていった。

## VIII

壁を通して、エレベーター前で、客と話をするG子の声が聞こえた。甲高い笑い声もした。僕は、その笑い声に押されるかのように漆黒の穴に入った。入った瞬間、カビ臭さが鼻をついた。ライトで隠し廊下を照らすと、

柱が一定の間隔で廊下を塞ぐように立はだかっている。人一人くらいは、楽に通れるくらいの幅があった。正面のガラス窓には、外観どおりのビルの名が貼ってある。隣のビルのネオンが窓にチカチカと反射していた。

落としたオレンジを拾い上げようとしたとき、内側の壁にプリクラのシールが貼つてあることに気付いた。客と※※嬢のツーショットのようだった。眼がマジックで線引きされていた。これは、明らかに後から隠し廊下を造った証拠だ。僕はカビ臭い息苦しさから、軋む窓を少し開けて外の空気を吸った。外の通りの車の音や、人の話し声が聞こえた。下を見ると、スタッフKがBMWに寄りかかって、何やら隣の同業者と談笑していた。そこに、女性スタッフJも居た。女性スタッフJは、チラッとこっちを見上げたような気がした。

窓を閉めると、廊下の闇に青く点灯している小さな光が見えた。近づくと、青い光の上の壁付近に、二号室のマジックミラーから漏れた光がうっすらと反射していた。壁には、盗撮カメラが固定されている。その下に盗聴機器もある。手前の一号室からも、僅かな光が洩れていた。それは、覗き窓用の小さなマジックミラーだった。

一号室のG子は、ついさつきラストの客を見送っていた。マジックミラーを覗くと、驚いたことに、G子がポンプを押している姿があった。そして、ベッドの鏡に接着

させた吸盤付デイルドを舐め回してから、口に赤いボールを咥えてオナニーを始めた。僕はG子に衝撃を受けて、頭がボーツとなった。二号室では、S子が足を痙攣させて本番をしていた。男の逞しい臀部が激しく動いていた。

・・・何か音がした。それは、倉庫の戸を開ける音だった。その戸は、静かに開けても戸車が減った音を出していた。その後、棒が倒れる音がした。僕は、身の危険を感じた。咄嗟に、窓の縁から天井に身を隠した。顔に、感触の悪い蜘蛛の糸が付着した。

・・・長い時間過ぎた。その音の主は、柱の陰で息を潜めて此方を窺っているようだった。

僕の股の下を、ずっと影が通り過ぎた。

その影は、盗撮器の辺りで、暫くの間、赤い光をチカチカさせていた。それから、ゆっくり戻っていった。しかし、恐怖はその後だった。僕が、力尽きて天井から降りたとき、背後に気配を感じた。振り向いた瞬間、バチバチと青白い閃光が走った。

## IX

・・・気がついたとき、僕は、窮屈な闇の中にいた。僕は、ダンボール箱の中に、体をS字に閉じ込められていた。首を曲げられて苦しく、胸に痛みがあった。スタングンにやられたことは明白だった。犯人の顔は、あるとき窓に反射したネオンの光で、一瞬見ることができた。女性スタッフJだった。

・・・ポケットには、携帯がなかった。

ライターで火を灯すと、ダンボールの内側に、小さなハングル文字が逆さに書かれてある。僕は、その固いダンボールに、鍵を何度も突き刺して、ようやく脱出することができた。

眼が慣れると、隠し廊下にいることがわかった。隠し廊下の入り口は、ベニヤ板で塞がれていた。外のネオンは消えて、雨が降っている。携帯は、柱の隅で幽かに点滅していた。盗撮機器は、片付けられていた。午前一時だった。着信が5件あった。G子とスタッフTからだった。

隠し廊下側から、ベニヤ板を押すと、僕が通れるくらいの間隙が開いた。

店内は、真っ暗で非常灯だけが、不気味に膨張して点灯していた。僕は、一号室に



入った。ベッドの赤いスモール・ランプを点けて、僕は、蛇口に口をつけて水を飲んだ。

G子にメールすると、携帯の電池切れのアラームが煩くなった。僕は、携帯に充電器を繋げて、ベッドに横になると、極度の疲労が一気に出たようだった。僕は、ホイットニーのグレイテスト・ラブ・オブ・オールを携帯で聴いて眠りに落ちた。

・・・夜、どこか重苦しく眼が覚めると、G子が僕を犯して獣のような声を出しているのだった。G子の髪が、僕の頬を打ったたびに香水の匂いがした。G子の終わりのない激しいSEXに沈み、互いに首を絞めながら意識がなくなる直前、僕のパンパンになったペニスの亀頭から強烈な快感と共にズルズルと這うように出たものは何だったのだろうか？

翌日、僕はG子と店に宿泊したことが公になって店をクビになった。

そして、その日を境に彼女達とは音信不通になった。

そのため、僕にとって盗撮の件は、その後一切が、藪の中になってしまった。

## X

・・・あれから半年経っていた。

梅田行きの電車は、淀川の鉄橋を折り返し通過していた。僕は、座席からドア付近に立った。中洲を眺めると、木舟は以前と変わることなく川の情景のなかに沈黙していた。

水面が、光に反射して賑やかに煌めいている。冬枯れの葦が、風に揺れ、白鷺が一羽木舟の近くを泳いでいた。

あれ以来、僕の心に突如顔を出す暗い疑念、それは、この情景には、似つかわしいものではなかった。それにしても、この昼下がり、鉄橋を渡る電車の窓から見える木舟の中には、老人の白骨死体があり、それを白鷺が覗いているというイメージを懐く人は、僕だけだろうか？僕は、車内を見渡した。

が、少なくとも、車内には、外の景色を眺めている人は誰もいなかった。携帯電話をいじっている人、本を読んでいる人、眼を閉じている人、これはいつもの車内の

有り触れた光景だった。

・・・メールを着信した。A子からだった。

「久しぶり・・・本当は、あれから警察沙汰になっているいろいろ大変だったのよ。盗撮犯は、Kよ。売人とG子は、一緒に逃亡したわ。」

メールしようと思ったけど、また迷惑かけると思ったから。私アレやめたの。

・・・ところで、外を眺めながら、何を笑っているの?」

僕は、驚いて後ろを振り返った

完

煌滂

一九五六年一月三十一日生まれ

一九七九年 パンタグリユエリヨン草

一九八〇年 パンタグリユエリヨン草

二〇一一年 エンドレスレイン

(特)同人誌創刊  
(監)

詩集

銀華文学賞応募